

前号を読んで

## 研究評価に対する視点の 多様さ

小野寺夏生

図書館情報メディア研究科教授

前号の特集「研究評価—法人化を迎えて」では、各学系の方々がそれぞれの論考や提言、あるいはそれぞれの組織内での評価作業や評価基準作成の経験を述べておられる。それらの内容を分けてみると、研究者（個人）評価に関するものが13件で全体のほぼ6割を占め、研究プロジェクト評価関係2件、学系や大学全体の組織評価関係4件、一般的あるいは総合的なものの3件であった。やはり教員の最大の関心は研究者評価であることを示唆しているように思える。

この特集を読んで最も強く感じたことは、研究評価には実に様々な視点があるということである。研究者評価を取り上げた13件に限っても、同じ趣旨で書かれたものはないと言ってよい。伝統的なpeer reviewによる評価が最も本質的とする意見もあれば、論文数、引用数、その他の業績の数量化による評価を支持する主張もある。研究業績の量や質よりもむしろ社会的な価値の

観点から評価されるべきとの主張がある一方で、基礎的研究に基づく知見と知識こそが社会から期待されているという指摘もある。社会的価値や社会貢献についても、その意味するところは多彩である。研究の価値は短期的な出口評価では測れないという声もあるし、研究評価だけでなく、教育、社会貢献、学内での貢献の総合評価で判断すべきという指摘もある。芸術分野における創作活動や臨床医学分野における診療活動のような、分野特有の評価要素についての考察もある。

これらの意見はどれが正しいというものではなく、それぞれに説得力がある。私はそれらをやや対立的に表現してしまったが、実はそれぞれがある面を強調しているだけであって、大きな目で見ると矛盾はないのかもしれない。

それにしても、これらの意見を包含するような評価システムを作ることは至難の業であろう。ただ、大学が今曲がり角にあり、その中で研究者と大学の在り方が厳しく問われていることが共通に認識され、各自がそれに対する答を真摯に求めておられることは全体からよく読みとれる。各人がその認識に立って自己の目標を設定し、到達実績を評価することが第一歩ではなかろうか。

〈おのから なつお／計量情報学〉